

# 宮 堂 遺 跡 II

—第3次発掘調査概要報告—

1995年3月

(奈良県北葛城郡)

河合町教育委員会

## 例　　言

1. 本書は1994（平成6）年度に河合町教育委員会が実施した官営遺跡の範囲確認調査の概要報告書である。
2. 現地調査は、1995年1月30日から開始し、1995年3月24日をもって終了した。
3. 調査組織は下記のとおりである。

調査主体 河合町教育委員会

調査担当者 河合町教育委員会事務局 社会教育課 技師・吉村公男

調査参加者 岩田英之、中西靖男、中原光男、小林美佐子、中山采子、末廣春枝

調査事務局 河合町教育委員会事務局 社会教育課

　　教育長・吉田守 教育次長・藤川一昭 課長・中山滋 係長・吉田昌泰

　　主事・山口登美子、木戸正人、五島晃

4. 本書を作製するにあたり下記の諸機関ならびに諸氏のご指導・ご協力をいただいた。  
ここに記して謝意を表す。

奈良県教育委員会、河上邦彦、豊岡卓之、辰巳和弘、中井昭雄、片岡秀起、前坂尚志、  
木場幸弘、前沢郁浩、杉本敏雄、富井徹、山崎弥一郎、松田真一、木下亘、坂靖  
(敬称略、順不同)

5. 写真は航空写真を株式会社アイシーが撮影し、遺構及び遺物写真は吉村が撮影した。
6. 遺物の整理及び本書の作製は吉村、中山、小林、末廣があたった。
7. 図1は平成4年修正版河合町全図(1:10,000)、図2は平成4年修正版河合町全図(1:2,500)  
をもとに作製した。
8. 本書の執筆・編集は吉村がおこなった。

## 本文目次

1.はじめに	
(1)調査の契機と経過	1
(2)位置と歴史的環境	1
2.遺構	5
3.遺物	10
4.結語	14

## 図 目 次

図1 宮堂遺跡とその周辺の遺跡分布図	1
図2 調査地位置図	4
図3 調査トレンチ平面図及び土層断面図	7～8
図4 出土遺物①	12
図5 出土遺物②	13

## 写真目次

写真1 宮堂遺跡と川合大塚山古墳群・廣瀬神社	3
写真2 和州廣瀬郡廣瀬大明神之圖	3
写真3 調査地航空写真	4
写真4 第1トレンチ航空写真	5
写真5 第1トレンチ全景（西から）	6
写真6 第1トレンチ南拡張区全景（北から）	6
写真7 第2トレンチ航空写真	9
写真8 第2トレンチ全景（東から）	9
写真9 第2トレンチ南西隅遺構（北から）	9
写真10 出土遺物①	10
写真11 出土遺物②	10

写真12 出土遺物③	10
写真13 出土遺物④	11
写真14 出土遺物⑤	11
写真15 宮堂遺跡から見た大塚山古墳（東から）	14



河合町の位置

# 1. はじめに

## (1) 調査の契機と経過

今回の調査は、平成6年度国庫補助事業として実施した範囲確認調査である。これまでに、宮堂遺跡の調査は、1979（昭和54）年に不毛田川改修工事に伴う事前調査として、奈良県立橿原考古学研究所により実施されている。この調査では、6世紀後半から7世紀にかけての堅穴住居跡3基等が検出されている。これらの堅穴住居跡は一時的な作業小屋のようなものと考えられ、集落本体は西側に展開するものと考えられている。また、1989年度に実施した河合町内遺跡詳細分布調査では主に不毛田川西岸付近で埴輪・土師器・須恵器・瓦などの遺物を多く採集している。

宮堂遺跡の北に所在する廣瀬神社に伝わる古絵図には、この宮堂遺跡にあたる部分に「定林寺」という大伽藍が描かれ、聖德太子の建立と伝えている。また、明治期には礎石が露出していたという伝えもある。

このような状況から、遺跡の範囲と内容を確認し、今後の保護対策の基礎的資料を整えるために1994（平成5）年度に範囲確認調査を実施した。宮堂遺跡内では、その立地から、今後も開発等に伴う発掘調査が増加するものと思われる。このことを踏まえて、調査成果を総合的に把握するため、1979（昭和54）年の調査を第1次調査とし、1994（平成5）年度の調査を第2次調査とする。したがって、本書で報告する1995（平成6）年度の調査を第3次調査と呼称することとする。

第2次調査は、微高地部分の西端に南北方向の幅1.5m・長34mのトレンチを設定し、人力により掘削を行った。調査の結果、トレンチの北端で、地山面が西へ傾斜することを確認したが、1mの厚さの包含層が非常に硬くしまった土であったため、調査に手間取り、費用と日数の関係から全体の掘り下げを断念せざるを得なかった。調査で出土した遺物は埴輪・須恵器・土師器・瓦・瓦器・陶磁器である。今次の調査に比較すると、相対的に2次調査時の出土遺物の量は少なく、また、細かい破片が多い。

今回の調査は、宮堂遺跡の立地する微高地の東側に2本のトレンチを設定し、調査を行なった。南側を第1トレンチ、北側を第2トレンチとした。第1トレンチは、微高地の南側の端に近い位置に設定し、東西10mで幅2mを掘削した。トレンチの西端で、南側への遺構の伸びを確認するため、南側へ長3.5m、幅1.5mを拡張した。第2トレンチは遺跡の中心部に近い位置で、第1トレンチの北側約24mの位置に、東西12mで幅2mに設定した。いずれも掘削は人力により行った。

なお、図面・遺物取り上げラベル・注記等は「宮堂2次」と記載しているものがあるが、2次は3次と読み替えるものとする。また、調査時に用いた高さの基準は、第2トレンチのAポイントを仮に標高41.487mとした。遺物の取り上げ、遺構の検出面の高さの測定等はこの仮の標高をもとにを行い、実測図等にはこの数値から得られた値をとりあえず記載している。その後、水準点測量の結果から、第2トレンチAポイントの標高は40.844mとの結果を得たので、本書では後者の数値から

得られる標高に基づき、調査時の数値はすべて0.643 m低い値を正とする。

## (2) 位置と歴史的環境

宮堂遺跡は、大和川へ奈良盆地の多くの河川が合流する氾濫原低地の微高地上に所在する。この遺跡はかつて巨大な前方後円墳の痕跡とされたことがある。東側を除いて、微高地の周間に幅50~70mの周濠状の地形が認められる。しかし、前方部にあたる部分は全く古墳らしい形状が残っておらず、また、第1次調査時に「くびれ部」にあたる部分から、古墳時代後期から飛鳥時代にかけての建物跡が検出され、宮堂遺跡周辺の古墳の年代や宮堂遺跡に見られる埴輪の破片の時期から、宮堂遺跡そのものを古墳とするには不自然な状況であり、曾我川等の旧河道とする方が妥当と考えられている。

宮堂遺跡の西側から北側にかけては、5世紀後半から6世紀前半に築造された川合大塚山古墳・中良塚古墳・城山古墳などの8基の古墳があり、北側には廣瀬神社が鎮座している。廣瀬神社は『日本書紀』天武天皇条に廣瀬大忌神として廣瀬の川曲に祭られたとあり、人和川右岸の龍田の風神と並んで廣瀬の水神として広く崇敬を受けてきた神社である。社伝では崇神天皇期の創建と伝えているが、恐らく7世紀以前に神社の母体となる信仰があったものと考えられ、大塚山古墳群との関わりも考慮しなければならないだろう。この廣瀬神社の西側、城山古墳の北側に現在の定林寺があるが、この場所には本来は廣瀬神社の神宮寺があった。現在の定林寺には平安時代後期の地蔵菩薩立像をはじめ、多くの仏像が伝えられているが、これらの仏像と建物の規模や構造は整合性を有していない。これらの仏像はもと宮堂遺跡の場所にあった定林寺に安置されていたものであり、16世紀の戦乱により定林寺が焼失したおりに神宮寺に移したとされている。また、宮堂遺跡の南西約

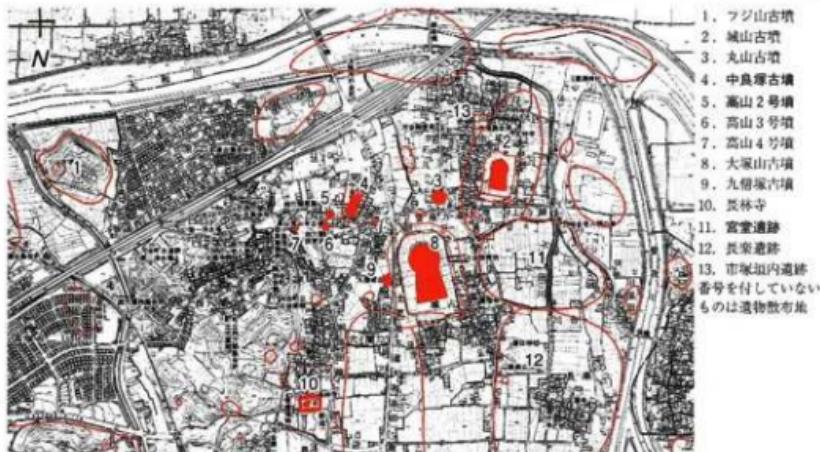


図1 宮堂遺跡とその周辺の遺跡分布図



写真1 宮堂遺跡と川合大塚山古墳群・廣瀬神社（上が北）

800mには聖徳太子建立と伝える長林寺がある。発掘調査の結果、伽藍がほぼ整ったのは7世紀後半と考えられる法起寺式伽藍配置の寺院であることが確認されている。

廣瀬神社に伝わる「和州廣瀬郡廣瀬大明神之圖」の成立年代は不詳であるが、絵図の中に描かれた内容から、16世紀以前の廣瀬神社とその周辺地域の様子を伝えるものとして注目される。

宮堂遺跡は、これまでの発掘調査と分布調査から、古墳時代以降の大規模な遺跡であることが予想される。採集されている遺物や伝承から、川合大塚山古墳群が築造されている期間に並行する集落や、7世紀以降の寺院があった可能性が高い。



写真2 和州廣瀬郡廣瀬大明神之圖



図2 宮堂遺跡調査地位置図



写真3 調査地航空写真

## 2. 遺構

### (1) 第1トレンチ

現状の地盤高は約40.70mであり、耕土（1層）はほぼ10~15cmの厚みをもって広がっている。耕土の下は灰褐色土（2層）である。2層は35~45cmの厚みを持つ層で、全体にしまりのない層である。このような状況からは古い時期の耕作土と思われる。

2層の下の3層は、茶褐色砂質土で、よくしまった層である。この層はトレンチ全域に広がりを見せ、この層内にはさまざまな遺物が含まれている。遺物はいずれも碎片で、磨滅している。

4層は、暗褐色粘質土で、トレンチの北側2分の1では遺構の埋土となり、南側及び南拡張区全域に広がりを見せる。つまり、4層が形成される時点ではトレンチの北側に高い部分があったことになる。4層の上面では、比較的大きく、かつ磨滅をあまり受けっていない遺物が、標高約39.80mの高さで分布している。東側及び南拡張区南端では10cm程下がり、微高地の自然地形の傾斜に合致したような状況である。4層上面に分布する遺物は、今回の調査で出土した遺物のほとんどの時代のものがみられ、近世以降に、北側の高い部分の土を削り、全体に括げたような印象を受ける。

トレンチの北西部では3層の下に明黄褐色砂（7層）の高まりがあった。非常に良くしまった硬い土で、当初、地山と認識したが、トレンチの他の部分の4層下の無遺物層は暗灰色の砂質土であり、また、若干の遺物の碎片が見られることから、地山とは考えられない。非常に硬い土であることから、よく突き固められたようで、建物の基壇の可能性が考えられる。しかしながら、かなりの



写真4 第1トレンチ航空写真

擾乱を受けているようであり、また、トレンチ内ではその広がりは確認できなかった。

この基壇状造構の東側には幅2.3mの溝状の区画があり、暗黒褐色粘質土（9層）が堆積している。この層は、南拡張区の南端で南東から北西に延びる不整形な区画の部分まで広がる。この南端までは約4.2mを測る。

この他、土壤や溝などのいくつかの遺構を検出しているが、確実に掘立柱建物の柱穴と考えられるものはない。土壟は20~25cm程度の深さのものが多い。トレンチのほぼ中央には長さ1.4m、幅20cm、深さ10~17cmの溝が、基壇状造構の南側に沿うようにあり、西から東へ傾斜している。

これらの遺構のうち、埋土内に遺物を含むものが約半数あり、いずれも中世以降の遺物は認められない。



写真5 第1トレンチ全景（西から）

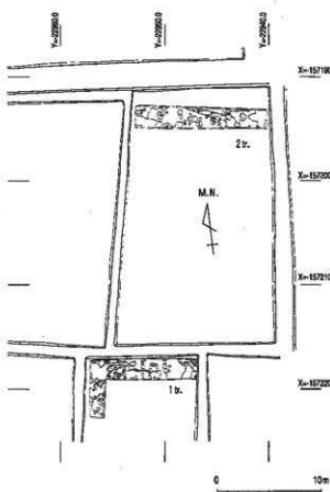


写真6 第1トレンチ南拡張区全景（北から）

## (2) 第2トレンチ

第2トレンチの現状の地盤高は標高40.80mであり、耕土（1層）は約20~30cmの厚みである。耕土下は、暗褐色砂質土（17層）である。この層は、層位的には第1トレンチの2層に対応するものと思われるが、厚さ65~90cmで第1トレンチ2層より厚く、かつ、2層より固い層である。また、遺物の碎片と砂粒を多量に包含している。このような状況から、第1トレンチの3層に対応することも考えられるが、不明である。17層の最下層ではくらわんか碗の破片も含まれ、したがって、17層は近世以降の堆積土である。

17層下は明黄色の砂質土で地山と思われる。このトレンチで検出した地山面は第1トレンチの地山とは色調が異なるが、土質は共通している。18層以下は遺構の埋土である。また、トレンチの北



第1トレンチ

- 1.耕作土
- 2.灰褐色土
- 3.茶褐色砂質土
- 4.暗褐色粘土
- 5.暗褐色粘土
- 6.暗褐色粘質土（4より細かい）
- 7.明黄褐色
- 8.黑褐色
- 9.暗黑褐色粘質土
- 10.黑色粘土
- 11.明褐色砂質土
- 12.暗褐色土
- 13.明黄色砂
- 14.黑色土
- 15.明黄褐色粘土
- 16.黄褐色砂

第2トレンチ

- 1.耕作土
- 17.暗褐色砂質土
- 18.暗褐色土
- 19.暗沉暗褐色砂質土
- 20.暗灰褐色粘土
- 21.暗沉暗褐色砂質土（19.に近似）
- 22.暗沉暗灰色粘土
- 23.暗褐色粘土
- 24.暗沉暗褐色粘質土（20.に近似）
- 25.暗褐色粘土（23より固く、灰沈じり）
- 26.暗黑褐色土
- 27.明黄色砂質土
- 28.黑色土

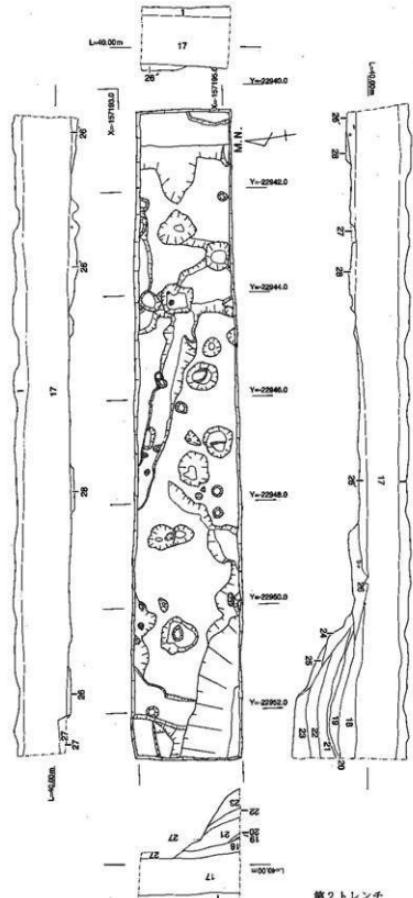
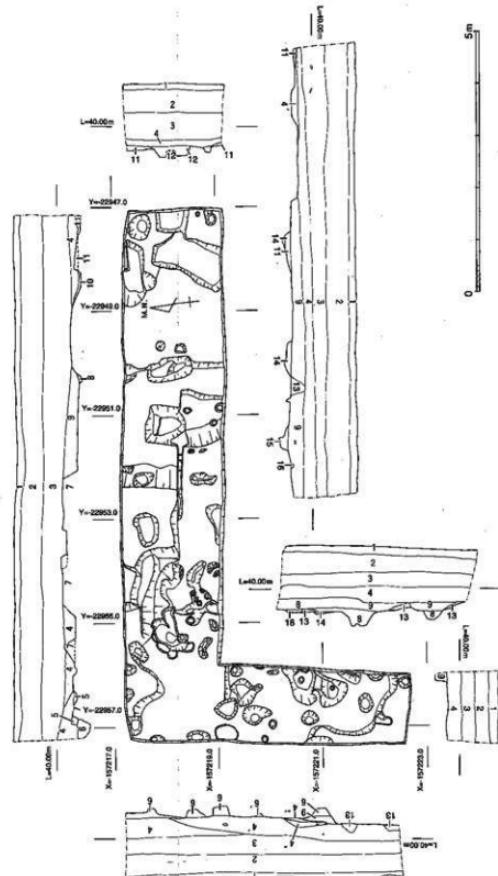


図3 調査トレンチ平面図及び土層断面図



第1トレンチ

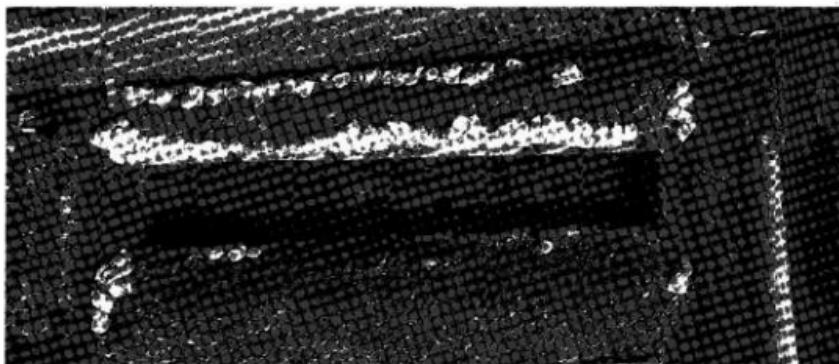


写真7 第2トレンチ航空写真

西隅に見られる27層は明黄色砂質土で非常にしまった土であり、第1トレンチの7層に共通した特徴を示している。このことから、この部分についても、基壇状の遺構の存在が考えられるが詳細は不明である。

この他、多くの土壙と溝を検出している。しかしながら、トレンチが狭小であるため、遺構間の対応関係は不明である。しかし、トレンチの南西隅で検出した深い溝（土壙）とトレンチ中央のL字状に屈曲する溝は、その方向に並行する可能性を読み取ることができ、何らかの対応関係にある可能性が考慮される。南西隅の遺構は、地山面からの深さが約1.2mを測る。埋没の状況は19層まで堆積したのち、肩部が削平を受け、その後、26・18層が堆積している。17層が堆積する時点では、窪地状を呈していたと思われる。24層で中世以降のものと思われる瓦が出土している。掘削・埋没の時期については現段階では不明である。

トレンチ中央のL字状の溝は、深さ10~12cmで、北壁付近で幅30cm、南壁付近で幅1mを測る。西北西から東南東へほぼ直線状を呈し、北壁から約4mの地点ではほぼ直角（約100°）に曲がり、南へとのびている。

また、トレンチの東端から5m、南から60cmの位置にある土壙から滑石製管玉が出土している。

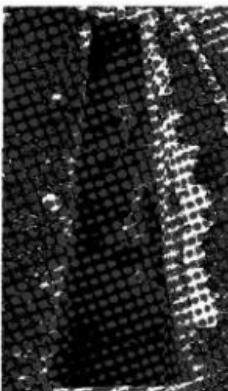
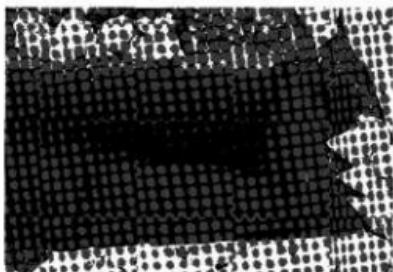
写真8 第2トレンチ全景  
(東から)

写真9 第2トレンチ南西隅遺構 (北から)

### 3. 遺物

遺物の種類は縄文土器・石器・埴輪・土師器・須恵器・瓦・瓦器・陶磁器など多彩であり、時代も多岐にわたる。これらの内、状態の良好なもの、官営遺跡を考える上で重要と思われるものの図または写真を掲載しておく。遺物番号は写真と図で対応している。一部、写真または図のみを掲載したものがある。

11~13は縄文土器である。11・13は深鉢。12は浅鉢の破片で、いずれも縄文時代晩期のものと思われる。また、石器については、すべてサヌカイト製で、1はスクレイパー、2は石錐、3~10は石鎌である。これらの石鎌のうち、最も状態の良好な4で全長2.5cm、最大幅1.6cm、厚みの最大値0.6cmを測る。

1・4・6・7・9・10・11・12・13は第1トレンチ、2・3・5・8は第2トレンチの出土である。

14は滑石製の管玉である。長2.1cm、直径0.5cm、孔の直径は約0.2cmで両側から穿孔している。色調は暗緑灰色を呈する。一方の端で一部を欠損している。

15は滑石製品であるが、種類は不明である。形状は台形を呈し、長2.95cm以上を測る。便宜上、幅の広い側を下辺とするが、下辺の幅は2.6cmであり、上部は現存部で推定幅2.1cmである。上辺部はさらに幅を減じるものと思われる。厚みは上部残存部で0.4cm、下辺中央部で0.8cm、側面では約0.6cmを測り、中央部が若干厚くなっている。上部のほぼ中央に直径約0.15cmの孔が穿たれている。色調は淡灰色を呈する。全体に表面は磨滅している。古墳時代のものとすれば、斧形や盾形等の形状が考えられるが、類例の知見はない。

16は第2トレンチの土壤内からの出土で、15は第1トレンチの包含層からの出土である。

16~18は鉄滓である。16・18は第1トレンチ、17は第2トレンチの包含層から出土した。この他にも小さな鉄滓が複数出土している。第1トレンチに多い。

19はフイゴ羽口である。第2トレンチの土壤内より出土した。

20・21は鉄製品である。20は残存長4.1cm、幅1.3cmを測る。片刃であり、刀形と考えられる。峰

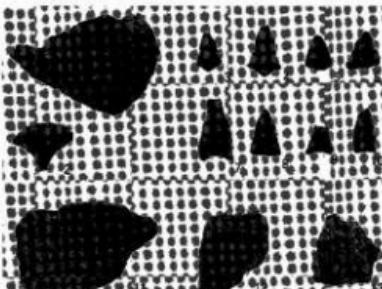


写真10 出土遺物①約1/3

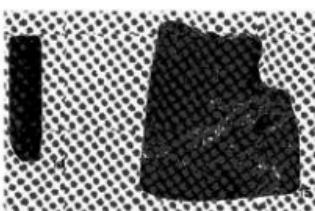


写真11 出土遺物②実大

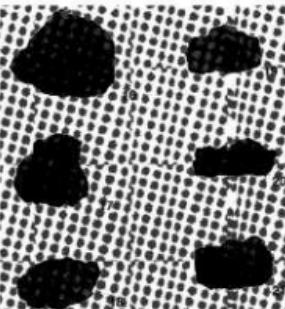


写真12 出土遺物③約1/3

の部分で厚さ0.35cmである。21は残存長3.8cm、幅1.9cmを測る。両刃で、剣形と考えられる。中央部の厚さは0.8cmであるが、劣化のため彫れているようである。20・21は第1トレンチ包含層からの出土である。

22・48～51は土師器高杯。  
22～25は土師器小型丸底壺。  
52・53は土師器壺。54は土師  
器壺である。22・23・52は第  
2トレンチの最下層上面の出  
土で、23・52は同一地点から  
の出土である。特に23はほぼ  
完形品である。いずれも5世  
紀後半代のものと考えられ  
る。24・25・49～51・53・54  
は第1トレンチ下層及び最下  
層からの出土である。48は同  
じく第1トレンチ南拡張区の  
土壌内から出土した。

26は土師器長胴甕、28は土師器椀で、前述の高坏等と同じく、第1トレンチ下層から出土。

27は須恵器高坏脚部、55は須恵器壺口  
縁部、30・56は須恵器坏蓋、29は須恵器  
坏。27・30・55は第1トレンチ下層から  
の出土。29・56は第2トレンチ下層から  
の出土である。

31~36は土師器皿である。31及び33は第1トレンチの北西隅部の土壤から出土している。35・36は第1トレンチ下層から出土。32・34は第2トレンチ下層からの出土である。

57は石製の硯で、第2トレンチの東端の遺構の埋土から出土している。58は青磁皿で第1トレンチ下層出土。

37~47は埴輪で、いずれも硬質のものである。

59は瓦で、第2トレンチ最下層出土。



### 写真13 出土遺物④

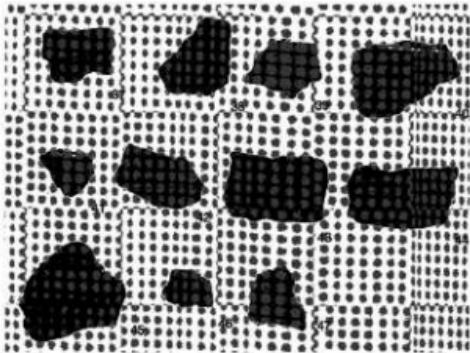


写真14 出土遺物⑤

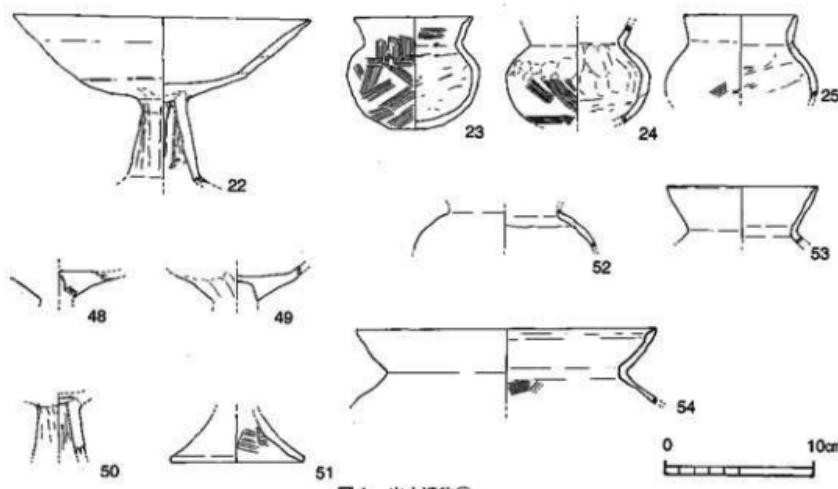
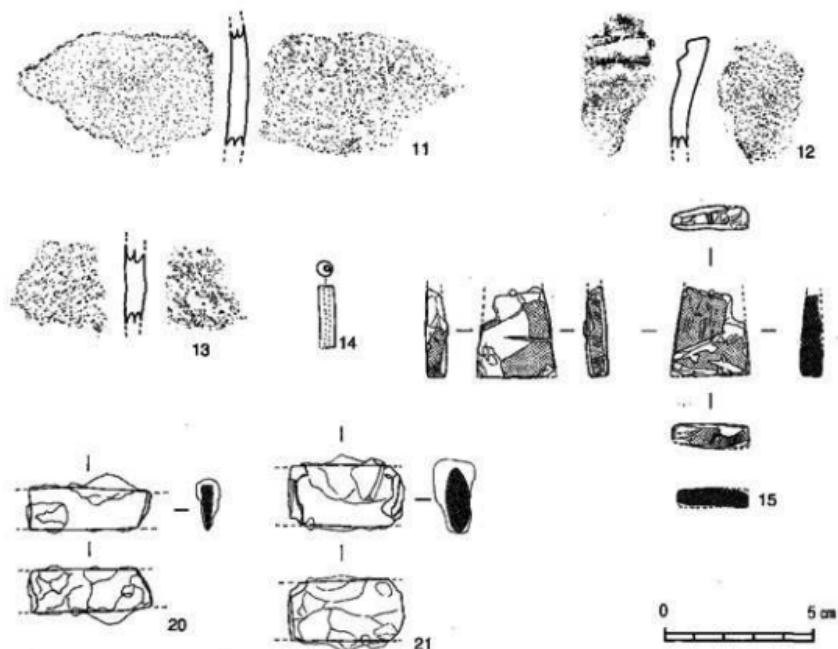


図4 出土遺物①

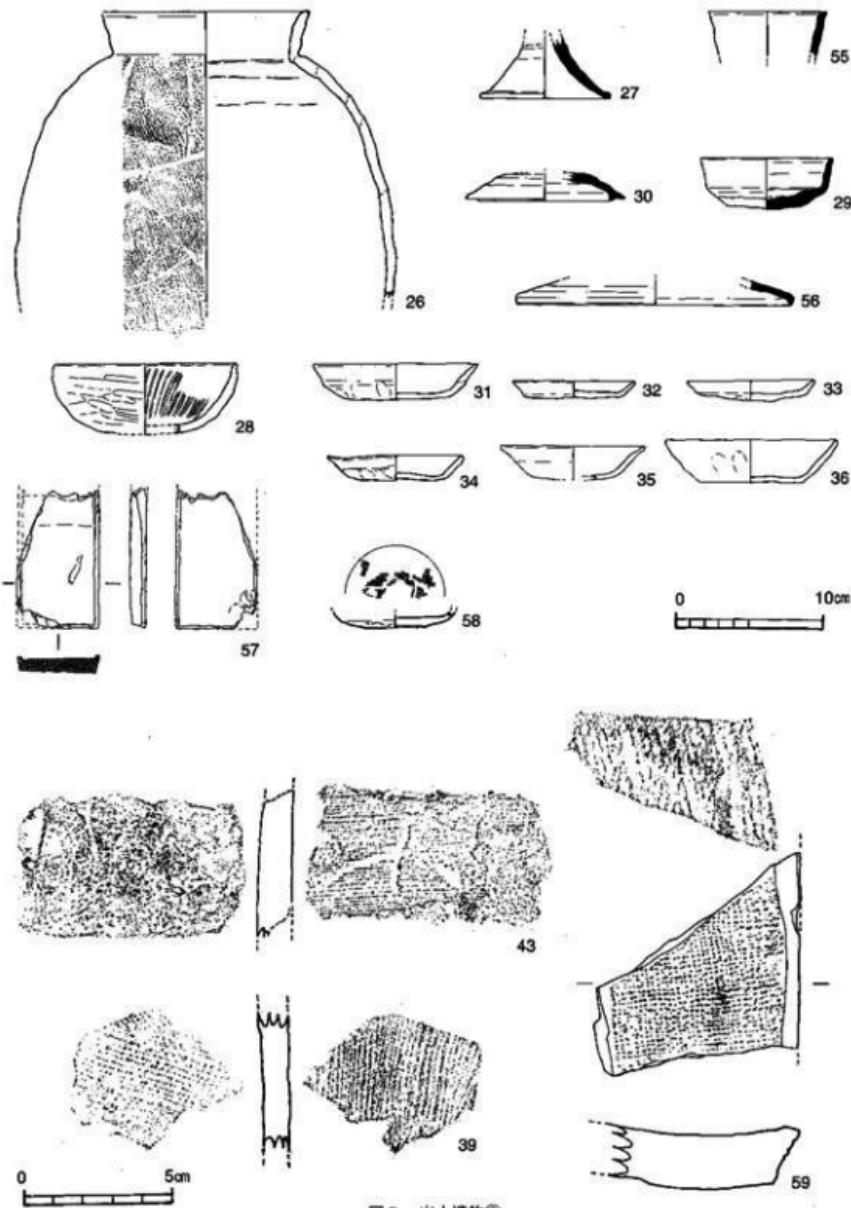


図5 出土遺物②

## 4. 結語

今回の調査では、2次調査に較べて多くの遺構を検出した。しかし、調査トレンチが狭く、各遺構の関係、各遺構に伴う遺物から得られる遺構の形成時期または埋没時期を特定できなかつたため、具体的な遺構の内容にまでせまることはできない。また、多くの遺物の出土を見たが、遺構との関係も不明確に終わった。

しかしながら、今回の調査では、大きく2点の成果があげられる。

1点は、縄文土器・石器が多量に出土したことである。河合町内における縄文時代の様相は、佐味田で縄文時代後期の土器破片が2点出土している他は全く不明であった。今回の調査により出土した土器は晩期後半と考えられるもので、また、石器についてもこれらの土器と同時期と考えられる。そして、石器は製品ばかりでなく、剥片や石核などもみられることから、製作も行なっていたと考えられ、当該期の遺構は判然としなかったが、集落があったことも推測される。宮堂遺跡周辺では、東安堵遺跡（生駒郡安堵町）や箸尾遺跡（北葛城郡広陵町）が縄文時代後期・晩期の遺跡として知られるが、新たに宮堂遺跡もその例として加わることになった。

2つ目の大きな成果としては、5世紀後半以降の遺物が多く出土したことである。このことから、大塚山古墳をはじめとする大型古墳が造られた時期に並行して、宮堂遺跡に集落が営まれていた可能性が考えられるようになった。集落としての遺構は確認されなかったため、宮堂遺跡内に古墳があったとも考えられるが、遺物の様相から、集落の存在を考慮するにやぶさかではない。また、鉄滓やワゴ羽口の破片が出土したことも注目される。これらについては、帰属年代が現段階では不明であるが、鉄製品の生産も推測でき、意義深いものといえよう。

今回の調査で、宮堂遺跡は縄文時代晩期になんらかの人間の営みがあったことが窺えるようになった。続く弥生時代の動向は不明であるが、大塚山古墳等の築造期に並行して、遺跡が形成されていたことは確実視される。飛鳥時代以降の遺物も多く、創建時期は不明であるものの伝承の「定林寺」が実際に存在したことも考えられる。宮堂遺跡の実像に迫る資料はまだまだ少ないが、その地理的条件や周辺の歴史的環境を考慮すれば、この遺跡が重要な遺跡であることは否定できないであろう。



写真15 宮堂遺跡から見た大塚山古墳（東から）

ふりがな	みやどういせきに							
書名	宮堂遺跡Ⅱ							
副書名	第3次発掘調査概要報告							
巻次								
シリーズ名	河合町文化財調査報告							
シリーズ番号	第11集							
編著者名	吉村公男							
編集機関	河合町教育委員会							
所在地	〒636 奈良県北葛城郡河合町池部3 TEL 07455-7-0200							
発行年月日	西暦 1995年 3月 31日							

所取遺跡名	所取遺跡所在地	コード	北緯	東經	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
宮堂	奈良県北葛城郡河合町 大字川合字宮堂	29427	034	34 34 56	134 44 58 19950130~ 19950324	47.6	範囲確認

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
宮堂	集落跡?	縄文時代後期 古墳時代中期 ~	溝 ピット	縄文土器 石器 土器器 須恵器 埴輪 滑石製管玉 滑石製模造品 瓦 瓦器 陶器器 鐵製品 鐵鋤 フイゴ羽口 銅貨(生還元資) 鏡	

## 河合町文化財調査報告

第1集 佐味田宝塚古墳	1986年
第2集 史跡乙女山古墳 付高山2号墳	1988年
第3集 長林寺	1990年
第4集 河合町遺跡詳細分布調査報告	1990年
第5集 高山3号墳	1992年
第6集 1991年度埋蔵文化財調査報告（市場垣内遺跡・史跡城山古墳）	1992年
第7集 穴闇～大型動物化石産出地内の発掘調査報告～	1992年
第8集 1992年度埋蔵文化財調査報告（長栄遺跡・フジ山古墳・川合大塚山古墳）	1993年
第9集 高山2号墳II・中良塚古墳	1994年
第10集 宮堂遺跡～範囲確認調査報告～	1994年
第11集 宮堂遺跡II～第3次発掘調査概要報告～（本書）	

---

### 宮 堂 遺 跡 II —河合町文化財調査報告 第11集—

1995年3月31日

編 集 河合町教育委員会  
発 行 奈良県北葛城郡河合町大字池部3  
TEL 07455-7-0200  
印 刷 明新印刷株式会社

---